

未来の読書とランデブー

新城カズマ

Sinjow Kazuma

生年不詳。遺書を誤送して消えた少年を捜す高校生たちの最も危険な一日を描く『15×24』は、はじめ多くの著作をもつ、『マルジナリアの妙案』『われら銀河をググるべきや』ほか多数。
twitterID: SinjowKazuma

第05回◎これは震災(だけ)ではない——もしくは「未来の電力と政府」が、否応無しにやって来た
QNE-05-PP

—— 2011年3月10日、都内の某ファミレスにて：

新城「(ケータイにむかって) はい新城です。すみませんウェブ版の原稿遅れてて……はい、題材は打ち合せ通り、ウィキリークス騒ぎを中心に、未来の編集とアーカイヴについて。はい、がんばります。……ふう。お、なんかちょっと揺れたな。震源地は宮城県沖か。そういえば最近大きな地震なかったけど、大丈夫かなあ……」

* * * * *

——3月下旬、同ファミレス：

新「……ああももしも。ええ、こちらは家族も友人知人も、あと蔵書も無事でしたし。原稿書き直しががんばります。……さあてと、書かなくちゃいけないことが増えたぞ。あまりにも色んなこと的前提が変わったし、それどころか今後も毎日変わってゆくはずだ。単なる復旧じゃ済まないだろうな、こ

れは。日常でもなく非日常の不安でもない、まったく新しい、いわば〈日常 2.0〉を生きなくちゃいけないんだ」

ウェイトレス「あの一ご注文は」

新「あ、そうか。えーと海老フライランチのセットを」

ウ「すみません、ただいま地震の影響で物流が滞っておりまして、メニューはこちらのものしかできないんですが(と、ラミネート加工された紙片を1枚だけ差し出す)」

新「あらら。こんなところでも〈日常 2.0〉が始まっているよ。東京はまだこの程度で済んでるから良いけど……しかも原発事故に関しては、どちらかというに加害者だし。そういえば電気も暗いなあ。夏の電力不足はどうなることやら」

E「いやーほんま頑張らなあかん一言うてるんですけどね」

新「む、君はもしかして未来の電力だな。なんでちょっとお笑い芸人風なんだ」

E「や、芸人と違いますて。わし関西電力のほうから来ましてん。ほれ、例の周波数変換で100万キロワットほど」

新「なるほど……って納得していいのかよく解らんが、とりあえず話を進めよう。今回からウェブ版に移行したとはいえ、べ切も文字数制限もあるんだから。いやはや、電子時代になったら、もうちょっとそのへんも楽になるかと思ったんだが」

E「なに言うてはりますねん。なんぼ電子じゃネットじゃ携帯じゃ言うたかて、要はぜ～んぶ電力システムにオンブにダッコですやん。ごっつい蒸気でデッカい羽根車まわしとるだけでっさ。センセ自身、この連載の第01回で指摘してはったやないですか。電気があかんことなっとうたら電子図書館もパァや、て。あれ読んでこの御仁は見どころあるわ思うたさかい、こうしてわざわざ顔出さしてもろたんや。ちうわけで、センセの言うてはる日常2.0とやらは、電力（が不足するかもしらん言う前提）の上に造り上げてかなアカンわけやね」

G「そこで自分の出番っす」

新「また新キャラが出てきたぞ。君は未来の政府じゃないか。今回は豪華な展開だな」

G「や一、なにしろ今回の3.11ってのは、未来の教科書にも載りまくるくらいの歴史的な大事件っすから。千年に一度の巨大地震に大津波、原発事故に計画停電、さらには世界にむけて部品供給していた精密工場が停まり、風評被害が吹き荒れ、それまで信頼されていた知識人たちはパニックで馬脚をあらわし、放射能除去と再建だけで国家財政が……」

新「む、財政がどうなるんだ。そういえば君らのキャラ設定は『未来から来た』だったよね。教えてくれ、僕の予測は当

たってるのかい？」

E&G「えーでも一ネタバレは禁じられてるしー」

新「わかった、じゃあこうしよう。僕の考えを言うから、それが的外れじゃなかったら黙って頷いてくれ。いいね？」

* * * * *

——そして、あっという間に4月中旬：

新「……というわけで経済的な帰結はGDP換算で5～8%ってところかな。それよりも気になるのが、そもそも20世紀どころか19世紀につくったような意思決定システムで、この3.11以後の日常2.0に対応すべき巨大組織の運営ができるのかってことなんだ。政府はもちろん、巨大企業も」

ウ「あの一ご注文は」

G「あ、自分は海老フライセットを」

E「せやったら、わしも」

ウ「かしこまりましたー」

新「え、もう海老フライセットできるようになったの？ 復旧するの早いなぁファミレスは……」

E「そらまあ計画停電も不評すぎて休止ちうことになりましたし。東京は、もうすっかり『傍観者』気分ですわ。こらぁ夏が思いやられますわなあ……」

新「でも頑張ってる人たちは頑張ってるよ。今回の騒ぎで

『デマが増殖するツイッターは駄目だ』みたいな意見もあったけど、僕の見方はちょっと違う。結局はどんな道具も使い方次第、知識も能力もその人の胆力次第だ。実際、停電危機から放射能情報が飛び交い始めた頃なんて、無名の民間人がざっくり作った『まとめサイト』のほうが政府や東電の発表よりも百万倍便利だったし……そうだ。考えてみれば、情報を集積すること、統計を取ることに、それらを管理し検閲すること……つまり『最終的に編集する権利』ってのは、それこそ、つい最近までは国家の独占だった。たとえば、自分たちの国や民族の「正しい歴史」を書き残す権利。何を「善いもの」「美しいもの」とするのかを、決める権利。それはいろんな姿かたちを取って、僕たちの日常の中にひそんでいる。国立の博物館や美術館に何を遺すのか。どんな事件を重要と見なして、記念日や記念碑をもうけるのか。どんな人を表彰し、誰を国宝と呼ぶのか。どういう言葉づかいや文字表記を「正しい」と決めるのか。なにが「間違っただおこない」と決めるのか。いや……それは誰かに認めてもらう権利というより、もはや「力」そのものなんだ。武力を専有することや国土を領有することと同じく……あるいはそれら以上に。ところが今回の3.11で分かってきたのは、20世紀の国家がこなしてきた、そうした権利＝力＝作業（の一部）な

ら、個人や小集団で、しかも短時間に、実行できるってことなんだ」

G「お、だいぶ分かってきたみたいっすねえ（ニヤリ）」

新「一人でも『ちょっとした国家や政府』くらいの働きが果たせるかもしれない……待てよ、ということは……そうか！あのウィキリークスの騒ぎと根っこは同じなんだ。さらに遡れば9.11テロとその後の戦争も、国家が個人に対して宣戦布告したとも見なせるから……なるほど……編集する権利……編集する能力……電力を、そして行政能力を……そういうことなんだね、セイフ君？」

G「わりとそういうことっす。未来の政府も電力も、実はみなさん一人ひとりのことなんすよ。政府がやることっつーのは、先ほどおっしゃったように「作業」であり「力」であるわけっすけど、よーするにみなさんの意見をできるだけ反映して、物事の優先順位をつけて、物と言葉とエネルギーの流れをうまーく調整して、できるだけ便利で安全でハッピーにしてく、っつーだけですからね。これ、みなさんも3.11で気づいたと思うっすけど、かなりな部分は個人がネットで出来るんっすよ。避難所の一覧をグーグルマップと連動させる可視化サイトとか、電車混雑状況をツイッターでまとめたタイムラインとか、物々交換の仲介SNSとか。もうちょっと仕

組みを進めれば、個人で発電した電力をやりとりすることだって可能っす。そもそも、みなさんが大都市に集まったり巨大パワーな電力つかったりすんのは、安全・安心な暮らしをしたいからっすよね。つまり不安から遠ざかりたいわけっす。不安つーのは孤独と無知と貪欲から生じてるっすから、どのくらいの『すげー都市や電力』が必要か？つーのは、みなさんの気持ちのありかたが決めるわけで」

新「なんか仏教の説法めいてきたなあ。僕はどっちかっていうと不可知論者なんだけど」

E「そんなん言うたら、お釈迦さんは不可知論者のチャンピオンですがな。いっぺん、きちっと読んでみなはれ。あと九鬼周造も重要なヒントぎょうさん残してまっせ」

新「へーそうなんだ。で、話を戻すと……不安の処理方法だね。どうするの？」

G「そりゃもちろん道具を正しく使うことで……ちなみに2011年4月のみなさんがいちばん不安なのは何なんすか？」

新「当面の不安といえば東電の原発事故だろうね。放射能が厄介なのは、目に見えないし、匂いも嗅げないから——」

E「あかん、このお人まだ分かっとらんわ」

G「そんな急がなくても良いっすよ、デンリョク先輩。けっこう良いセンまで来てるっすから」

新「どういうこと？ ていうか、君ら先輩後輩だったの？」

G「そのへんは裏設定なんで、今回はパスっす。それで、放射能に不安になるのは、なんでなんすか？」

新「だから目に見えないから……つまり生物としてのヒトの知覚では捉えきれないから……放射性物質を捉えるためには、科学と技術が必須になる。でも科学の言葉はあまりにも日常離れしてるし、正確な情報を伝えようとすればするほど時間がかかるし、今後変化する可能性の幅もあるので断言できなくなり、かえって陰謀論に火がついてしまう。理想を言うなら、僕たち一人ひとりが科学の心を……いやその前に科学的な情報の摂取を……あっそうか」

G「そういうことっす。まずは情報っす。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚といった五感、さらには重力感覚、平衡感覚、身体統合感覚なんかも合わせたこれまでのヒトの『知覚』に加えて、今後はヒトと技術が一体となって発揮される『情報覚』が必要になるっす」

E「なんやのん、ネタバレ禁止ちうといて～」

G「これっくらいはセーフっすよ。なにせ自分、名前もセイフっすから」

新「ここにきて親父ギャグって！（右手でツッコミを入れる）……それはともかく、情報覚ってどうすりゃいいんたい。右

手にガンマ線探知機を埋め込むとか？」

G 「いやいや。べつにサイボーグ化しなくても、みなさんの目の前に、もの凄げえテクノロジーがとっくの昔からあるじゃないですか。時間と空間を超えて、気持ちや意見を交換する、この惑星で人間しか持っていない素晴らしいものが」

新 「え？」

G 「読書っすよ。これこそが文明の神髄っす。考えてもみてください。千年に一度の自然現象とガッブリ四つに取り組むには、人間も千年単位のテクを駆使するのがベストじゃないですか。これすなわち嘗々と積み重ねられてきた知識の体系……**文字文明**っす。偶然にふりかかる事象を吟味し、理解し、のりこえてゆく。一人でがんばる能力は必要だけど、独りでは生きてゆけないことを自覚して、手をさしのべ、仲間をつくって、前へ進んでゆく」

E 「せやせや。いまセイフのやつがええこと言うた。ほれ、昔から歌にありますやんか。友を選ばば書を読み、六分の狭気、四分の熱」

G 「それこそが人間の生み出した最良の技であり、力であり、胆であるわけっす。というわけでこの連載のメインテーマ、読書案内に原点回帰っすよ（と、本を数冊取り出す）」



寺田寅彦
『寺田寅彦随筆集』
岩波文庫

九鬼周造
『偶然性の問題・
文芸論』 燈影舎



小松左京
『日本沈没』
小学館文庫



小松左京
『首都消失』
ハルキ文庫

小松左京
『復活の日』
ハルキ文庫



新 「うーん、やっぱり『情報覚＝胆力』を磨くにはまず古典読破ってことかあ……僕もいろいろ読まなくちゃ」